

ロマ差別の助長を懸念して

IMADR では金子マーティンさんから連絡を受け、急いで問題となるこの本を入手した。表紙を見て驚き、中を読み進むにつれさらに驚きあきれ、怒りを感じた。そして、6月22日、IMADR-JCとして著者および出版社に抗議の手紙を出した。両者からの反応はないが、事実を広く知らせるために、その内容を金子さんに検証していただく。(編集部)

たかのてるこ著『ジプシーによろこそ!』と ロマ差別を助長する日本の勢力

金子 マーティン(IMADR事務局次長)

1. 無知なことについて

言及する特権がエッセイストにはあるのか

エッセイストのたかのてるこ氏の著作『ジプシーによろこそ!』が2011年4月に幻冬舎から出版された。小林よしのり氏の「歴史修正主義」マンガなどの出版も手掛ける幻冬舎は、いわゆる「自由主義史観」支持団体の一企業である。蔑称・差別語の「ジプシー」という他称で呼ばれた少数民族をその自称のロマで呼ぶことが、現在では国際社会の大勢を占めるようになり、日本の大手マスコミも「ジプシー」をロマと言い換えている。「呼称に関する第1の原則は、その先住民族やマイノリティ集団自身が選択した“自称”に従って語り、記述すること」⁽¹⁾である。そのような時勢に「ジプシー」の語を使ったたかの著は、まさに時代錯誤的で挑発的な作品といえる。もっとも、わずか2週間のルーマニア滞在後に書き下ろしたたかの氏の著作の問題点は、差別語の使用につきるものではまったくない。

無知に基づく誤認をたかの氏は執拗に反復する。いわく、「ジプシーには、過去や未来といった概念がないのだ」(345 & 350頁)。その虚偽性を容易に見破ることができる主張を、たかの氏はブログの「てるてる日記」(8頁)や「ジプシーに恋して」(3頁)でも性懲りもなく繰り返す。たかの氏はおそらく、参考にした日本語文献からその「知恵」を授かったのだろうが、イギリスの作家ジョージ・ボローは「ジプシーには、明日や昨日という概念が

ない」⁽²⁾とすでに1874年に記している。だが、それは誤認である。『英語ロマ二語辞典』を引くと、「明日」と「昨日」という言葉がロマ二語にあることが確認できる。同じことは「過去」と「未来」にも該当する。『英語ロマ二語辞典』でパースト(過去)とフューチャー(未来)を引くと、過去はアラキ(araki)、未来をアヴトノ(avutno)と載っている⁽³⁾。知識よりも予断と偏見が先行したたかの氏は、結果的に読者をあざむいたことになる。

さらに、たかの著の記述内容そのものが差別的である。ホームスティさせてくれた60歳のロマ婦人カティについて、「何から何まできちんとしているカティは、ジプシーなのに、ジプシーじゃないみたい」(217頁)やら、「ジプシーではあっても、ゴリゴリ、のジプシーではないカティ」(269頁)とか、「ジプシーっぽくないカティ」(333頁)などの言葉を並べ立てるたかの氏。たとえ「ジプシー」の語をロマと言い換えたとしても、それらの文章によってたかの氏は自分が「ジプシー」についてある種の否定的固定観念を抱いていることを無自覚的に明かしている。「ジプシーは早婚」だとたかの氏は再三強調する。カティは14歳で結婚したので、たかの氏の理解でも「ジプシーっぽい」わけだ。でも、彼女の家は「きちんとしている」、だから「ジプシーっぽくない」とたかの氏は感じた。つまり、掃除が行き届いていないゴミの散らかった家に「ジプシー」たちは暮らしている、そのような偏見に自分は呪縛されていることをたかの氏は

(1) 小林健治『差別語 不快語』(人間出版, 2011年), 180頁。

(2) George Henry Borrow, *Romano Lavo-Lil* (BiblioBazaar, Charleston, 2007 [初版1874]), p.13.

(3) Ronald Lee, *Romani Dictionary: English-Kalderash* (Magoria Books, Toronto, 2011), pp. 315, 214.

自ら告白している。

欧州連合 (EU) に統合されたヨーロッパ各国で極右勢力によるロマへの襲撃事件が続発している⁽⁴⁾。たかの氏や幻冬舎首脳陣がそのニュースを知らなかったとは考え難いが、もし知らなかったとするのなら、どこまでも内向きなその偏狭な姿勢は驚きに値するだろう。

2. ロマ差別を背後から支えるニッポンの右派勢力

反差別国際運動日本委員会 (IMADR-JC) は6月21日にたかの氏と幻冬舎に抗議文を送った。英語書名が『ジプシー世界によろこせ! (Welcome to Gypsy world!)』であるたかの著の情報を筆者はテキサス大学オースティン校の「ロマニ関係文書資料センター」のイアン・ハンコック教授に伝え、同教授はその情報をアメリカ大陸居住のロマのメーリングリスト (Roma_in_Americas@yahogroups.com) に公表した。しばらくして、「日本を2週間訪問し、『ジャップ世界によろこせ』を著わしたなら、日本人はどう思うだろう」と問うメールが、そのメーリングリストに載った。わずか2週間の滞在で訪問国の少数民族についての本が書けると思い込んだたかの氏、およびそのような本を発行した出版社のおこがましさへの批判だ。抗議文発送から1カ月以上が経過した段階でも、著者や出版社はIMADR-JCの抗議文黙殺を決め込んでいる。EU圏内においても暴力的なロマ差別が大手を振ってまかり通っているので、日本でいくら「ジプシー」差別をしても恐れることは何もないと両者は確信したのだろう。

おまけに、『ジプシーによろこせ!』の著者たかの氏を、特定のマスメディアがもてはやしている。たかの著発行の翌月、5月14日に「ジプシーに恋して」というプロデューサーと演出の両方がたかの氏自身で島田紳助氏が聞き手の放映時間90分の深夜番組をフジテレビが放映した。最近までたかの氏が勤務していた東映とフジテレビの合作で、その

テレビ番組のDVDが9月21日に発売されるという⁽⁵⁾。また、7月31日の『産経新聞』にたかの氏のインタビューが掲載された。そこでも「過去も未来もなく『今』を生きるジプシー」との誤認をたかの氏は繰り返す⁽⁶⁾。世界有数の規模を誇るマスコミ複合企業のフジサンケイグループが、たかの氏のロマ差別本を背後から支えているとみてほぼ間違いないだろう。

3. 「ジプシー」差別大国、ニッポン

EU諸国で蔓延している「ジプシー」に対する暴力事件を、大半の日本人は「対岸の火事」程度にしか受け止めていないと見受ける。現在、ロマは日本で暮らしていない。だが、日本帝国主義の「落し子」ともいえる在日コリアンは日本の生活者であり、そのマイノリティを構成する人びとに対する人権侵害を「愛国心」だと心得る「在日特権を許さない市民の会」(2007年発足)の暗躍は読者諸氏にとっても周知の事実だろう。「ジプシー」が日本で暮らしていない現実、それは当事者たちにとってとても幸いなことだと思う。

1901年9月に長崎へ渡来した「総勢50余人のヂブシーの一隊」は、「西洋穢多」の名をもって新聞に登場した⁽⁷⁾。かつてのナチスと変わらず、現在でも少なからぬ日本人は「ジプシー」を「犯罪種族」と認識しているようだ。たとえば在ベルリン日本領事館が1994年に「ジプシー風グループ・スリにご注意!」の掲示を張り出して⁽⁸⁾、日本外交官の人権意識欠如が露呈した。日本の「大手旅行会社が『ジプシー』を犯罪者とみなした記事を掲載し、抗議された例もひとつやふたつではない⁽⁹⁾。

ロマの人権にかんする理解度は、EU圏内においてすこぶる低い。だが、未だに「人権擁護法」も制定されておらず、たかの著のような差別本を発行・販売・宣伝できる日本は、そのEUと比較しても数10年は遅れていると指摘する他はない。(かねこ まーていん)

(4) 金子マーティン「統合されたヨーロッパで続発するロマ差別」(反差別国際運動日本委員会編『平和と人権普遍的实现をめざして』所収, 解放出版社, 2011年), 14~18頁参照。

(5) 「銀座OL 世界をゆく! ⑤ ジプシーに恋して」
<http://takanoteruko.com/gypsy/gypsy.html>

(6) 「著者に聞きたい ジプシーによろこせ! たかのてるこさん」(『産経新聞』2011年7月31日)。

(7) 「西洋穢多の舶来」(『京都日出新聞』1901年9月17日)。

(8) 金子マーティン「人権赤字国ニッポン」(『週刊金曜日』第29号, 1994年6月10日), 61頁。

(9) 前掲註(1), 179頁。